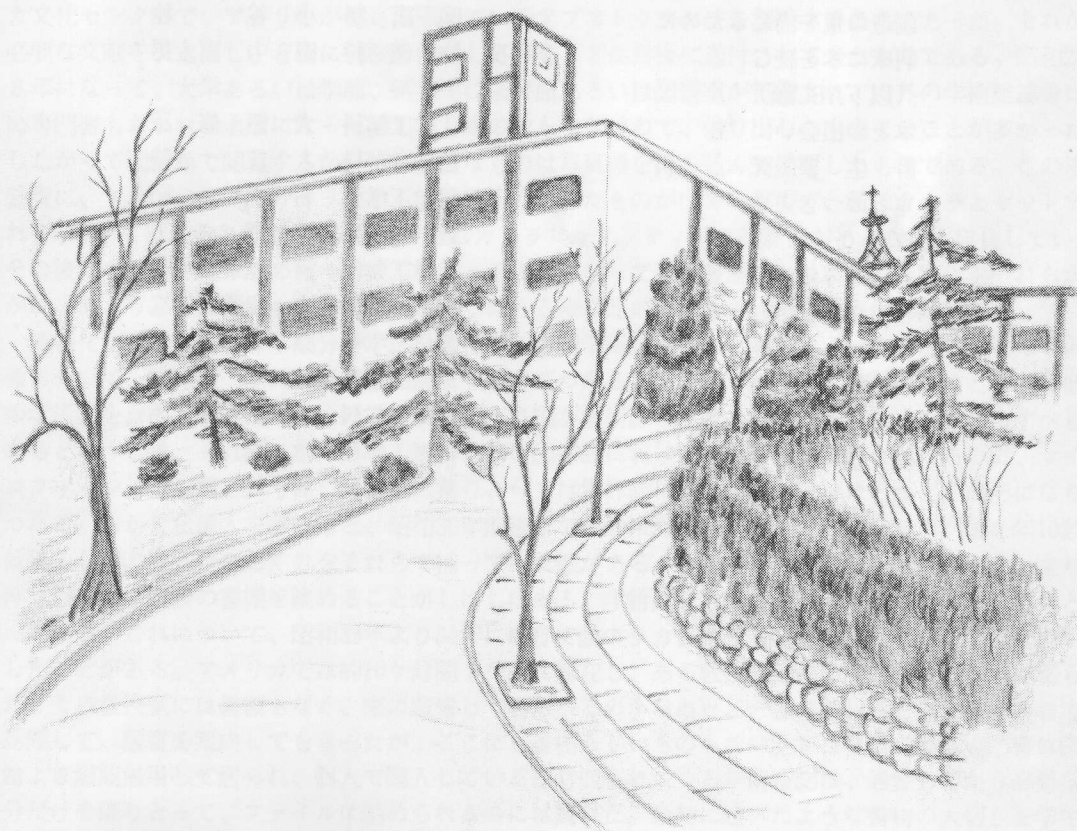


奈良高専  
図書館だより  
20号特集



## 20号 特集 目 次

〔巻 頭 言〕 図書は今昔 校 長 櫻 井 洸

昭和60年度読書感想文コンクールを終えて 図書館委員会図書部会  
国語科 細 井 誠 司

発表作品 (五 題)

図書館委員会この一年の活動 図書館委員 機械工学科 関 口 秀 夫

20号によせて

創造の泉を備えるために	国 語 科 小 谷 稔
病床に本を読む	委員長 物 理 科 田 中 富士男
(以下ABC順)	
本との出会い	化学工学科 犬 田 修 正
酔 生 夢 死	数 学 科 入 江 隆
本とのつきあい	化学工学科 石 垣 昭
無 題	数 学 科 笠 野 卓 夫
心にしみる本	化学工学科 河 越 幹 男
書くことと読むこと	機械工学科 小 畠 耕 二
科 学 雑 誌	電気工学科 京 兼 純
読 書 の 効 用	機械工学科 宮 本 止 戈 雄
みえてきた図書館像	電気工学科 宮 田 正 幸
歴史書に親しもう	機械工学科 水 嶋 巖
無 題	英 語 科 溝 端 清 一

図書室から

- I 図書館だよりの歩み(抄)
- II 「読書週間」の催し、その他



## 図 書 の 今 昔

校 長 櫻 井 洸

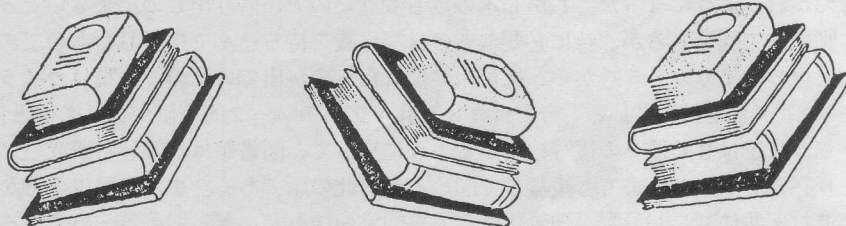
昭和17、8年と言えば太平洋戦争のさ中、私は阪大の学生であった。指導教官である上野誠一教授に、毎月1回請われて書籍店「丸善」へ同道した。毎回10冊近い洋書を買って求められ、それを大学まで持ち帰ったことも若い頃の清らかな思い出である。先生はそれを翌月までに読破され、御自身も原稿を書かれて、我々が電話帳とあだ名をつけた2千数百頁の分厚い専門書を出版された。そこで買って来た洋書を見せてもらおうと、借りに行っても貸してもらえず、読みたいことがらを説明すると、その本をとり出して先生が頁をめられる。見ようとのぞきこむと、つばがかかると本を引かれるというふうになり、非常に本を大事にされた。著書の大変な苦勞を思っていることもあろうと考えたことであった。勿論今のように複写などは夢にも考えられない時代であった。

戦後大学へ復帰して研究をはじめたが、外国の情報を知る手だてとしては、大阪市内にあったアメリカ文化センターで、アメリカが毎月出版しているアブストラクト誌を詳読することであった。それから必要な文献を引き出し、著者に別刷を依頼して、2、3ヶ月後に送付されてきたものである。昭和27、8年になって、大学あるいは学部、研究所に図書館あるいは図書室が整備され、内外の学術雑誌をはじめ専門書もおかれるようになった。しかし本の数も少ないので、借り出しの出来ないことが多かった。したがって図書館で閲覧するか、特に必要なものは写真機を持ち込んで接写したものである。この接写装置に、ドイツのライカカメラ社から、携帯用の優れたものが出ていたので、私はカメラとセットでこれを求め、今だにそれを持っている。今ではカメラ共々アンティーク的価値があるものと自負している。その後ゼロックスをはじめ種々の複写機が出るようになって、図書館は勿論、各研究室にもそれらが置かれ、あまり必要でないものまでも複写して溜める今日此の頃である。まさに隔世の感がある。

情報化が進むと共に、学問分野が細分化されて専門学術誌もどんどん増える一方である。この学術情報について、数年前国際的に話し合われた問題が二つある。その一つは、単にほしいからと言って他国の学術誌を自由に購入出来る今のシステムを、各国が学術誌を出版してそれを交換するようにすべきであるということ、それにこれだけ増えてくると、図書館における蔵書が大変なことになるので、マイクロフィッシュで貯蔵しようということになり、今では世界的に著名な学術誌はほとんどこの形になりつつある。しかし私個人を顧みると、昭和30年前後までは欧米先進国から出されている専門書を年10数冊は購入して、敗戦後のおくれをそれらで補っていた感がある。今でもそれらの書物の内容がくっきりと浮ぶ思いで、書齋の書棚を眺めることがしばしばある。学術雑誌も日、英、米、独のものがずらりと並んでいる。これについて、昭和33年より34年にかけてアメリカ、ヨーロッパを廻った時、異様な思いをしたことがある。アメリカでは約10ヶ月間1ヶ所に滞在し、ある教授の部屋の隣に私の居室が与えられた。その教授室には書棚もなく、家に蔵書して居られるのかなあと、一種の期待感をもちながらお宅を訪問して、居室を案内してもらったが、ここにも書棚らしいものもない。すなわち必要な専門書は図書館より短期借用して居られ、個人で購入している毎月送られてくる学術雑誌は、通覧してから必要な部分だけを破り取って、ファイルに納められるのには驚いた。最初に述べたような書物の大切さを学生時代に教えられた私にとって、アメリカは随分違うなあと、目をパチクリさせて思ったことである。滞在中度々教授の部屋へ行って、研究についての討議をしたが、その時参考文献、すなわち破りとられた報文が、整理されたファイルから容易に引き出される。なるほど本のままで書棚においては、こう簡単にはいかないなあと、アメリカ人の合理性を感心すると同時に、さらに小さい時から「勿体ない」の言葉が、頭にこびりつくぐらいの育ち方をしている国民性の違いによるものと考えたことであった。と

ころが、ヨーロッパ各国を訪問すると、教授室あるいは教授宅には整然と蔵書されている。むしろ日本以上に祖父の代からのもの等、かなり古いものを蔵しておられる方々もあり、ひと安心したことであった。私の恩師等、日本の諸先生は、若い頃ヨーロッパで学ばれた方が多く、これが日米の違いをもたらしたというまずまずの正解が得られた。それにつけ思うことは、一つの物事を考えたり、研究したりするのに、広い視野に立って行わねばならないということである。国際化社会の意義、それに各国の文化は色んな社会環境、因子により、長い年月を経てつくられることを強く感じるものである。

これからは書籍、学術雑誌が益々増え、すべてを個人で所有することは不可能である。しかし直ちにアメリカ式にはゆかず、私は今の所、購入している専門学術書並びに学術誌をはじめ、それらのアブストラクトを通覧し、自分なりに情報整理、すなわち取捨選択をして、カードなりノートに分類整理し、先にはパソコン利用も考えているが、いつでも必要なものは索引出来るようにしている。しかし家の書棚も飽和状態に達してきていることでもあり、特殊なもの以外は本校図書館をもっと利用せねばならない。幸い国立高専の図書館の規模、蔵書数は大学に準じるものであって、かなり充実されている。さらには図書館の電算化も行い、蔵書、貸し出し業務の機能化と共に、他の図書館とのネットワークもつくられることを期待している。学生諸君も、もっと図書館を利用しての自主的な勉学をはかってもらいたい。企業においては、進展する科学技術の情報収集に、図書による所が大きいことでもあり、どのような問題あるいはことごとに対して、どのようにしたら容易にその情報が得られるかを、学生時代に知っておかねばならない。また必要な図書を学生諸君から積極的に要求するぐらいになってほしいものである。



## 昭和60年度読書感想文コンクールを終えて

図書館委員会図書部会  
国語科 細井誠司

毎年恒例の、夏休み課題図書（4年生以上は自由選択）の読書感想文コンクールは、今回で10回めになります。図書館委員会（8名）と国語科（2名）の教官とで慎重に審査した結果、次に掲げる9名の諸君の作品を、優秀作として選出しました。氏名をここに紹介して、努力をたたえたいと思います。

- |     |              |      |                   |
|-----|--------------|------|-------------------|
| 4 E | 谷口甲二（中原中也詩集） | 3 MB | 柿田佳男（どくとるマンボウ青春記） |
| 4 C | 小川 洋（ビルマの竖琴） | 1 C  | 中西圭子（裸の王様）        |
| 3 C | 中西三奈（沈黙）     | 4 C  | 西門孝子（銀河鉄道の夜）      |
| 2 E | 佐藤公美（それから）   | 2 MB | 藤原英樹（裸の王様）        |
| 3 C | 岩佐淳一（それから）   |      |                   |

このほかに、校内コンクールで佳作として選ばれた諸君は、次のとおりです。

1 MA 西垣 勝	1 MA 森本泰正	1 MB 田中泰宙	1 MB 田中弘文
1 E 小山良彦	1 E 横井正俊	1 C 河野博美	2 MA 木村高志
2 MA 小田原賢二	2 MB 上北弘樹	2 E 吉澤 力	2 C 坂本昌代
2 C 飯田康博	3 MA 木曾 智	3 MA 畑 尚治	3 MB 比嘉盛作
3 E 大石 明	3 E 藤野富美	4 MA 當麻昭夫	4 E 平田好充
4 E 藤田勝利	4 E 上田博巳		

なお、角川文化振興財団主催「読書感想文全国コンクール」の「奈良県コンクール」（奈良新聞社共催）の高校部門で、2 E佐藤公美さんが最優秀賞を、一般部門で4 C福山稔章君が優秀賞を、それぞれ受賞しました。さらに、佐藤さんの作品は、全国コンクールでも佳作に入賞しました。その栄誉をたたえたいと思います。

学校の図書室へは、賞品として「スクールライブラリー愛蔵版」が2セット贈られて到着しています。次に、校内コンクール上位入賞4名の作品と、佐藤さんの作品とを掲載します。



## 「中原中也詩集」を読んで

4 E 谷 口 甲 二

「きらびやかでもないけれど  
この一本の手綱をはなさず  
この陰暗の地域を過ぎる！」

（「寒い夜の自我像」）

詩との出逢いというものは、運命的なものだとよくいう。ふと本屋で見つけた一冊の詩集、その中の何編かの詩、どこかもの悲しいオノマトペや心に強く響くリフレイン、そんなものが終生その人の心の奥底に投影されて忘れ去られることなく魂の基調音となって流れ続ける。しかもその出逢いが、ある日、突然にやって来る。

やって来たものが、優婉な言葉で綴られたものであるとか、あるいはどこまでも浪漫的な仮構であるとかすれば、それはそのまま読む人の心を潤し、不思議な安らぎをさえ与えてくれる。しかし私が初めて手にした詩集、中原中也詩集を読む限り、そんな優しくぼんやりとした詩のイメージは彼の詩の律動的に吐き出される、不愉快、不機嫌

をも含め彼の全生活の心情の集約された言葉に圧倒されてしまう。飄然と自己を眺めお道化のような、しかも希望の失せた静かな呟きのような、汚れた詩、込み込んだアンニュイの雰囲気一。けれどもそれでも私の心を魅了してやまない。美しい物を感じるのとはまるで違う共感、そんなものがどくどくと私の心に流れ込んでくる。

彼の心に一生涯まわりつき、一生をかけて彼が見つめてきたものは彼の我執だけだった。人は人と融合することで自身の我執から解放される。自分の心に相手を浮ばせ、相手の心に自分を浮ばせることができる。しかし彼は終生他人との融合を試みなかった。他人の中に溶け込んで自身の正体を失くしてしまうよりも、周囲との断絶の中にあって強く奮い立つ自分の姿を理想とした。自分が真に自分自身であるため、唯一無二の存在であるため、そのすべきことは真の自分の詩を作ることであった。詩集の後記に彼自身こう言っている「ただ私は、私の個性が詩に最も適することを、確実に確かめた日から詩を本職としたのであったことだけを、ともかくも云っておきたい。」と。ここに言う確実に確かめた日とは彼は十五歳の頃

である。そしてそれ以前、彼の最初の詩作から始まる詩生活の起点は彼が八歳の時であったと自ら述べている。恐るべき自負である。その事の事実はどうあれ、こうも自分の足跡を確定したがる中也の姿には一種異様なものが感じられる。

「人には自恃があればよい！／その余はすべてなるままだ…／自恃だ、自恃だ、自恃だ、自恃だ／ただそれだけが人の行ひを罪としない。」この強い語調から彫り出される彼の堅い信条、あくまで自分をしか頼みにしない性情、そこからは必然、他人との対決、あるいは衝突が生じてくる。「貴様達は善いものも美しいものも求めてはをらぬのだ！／貴様達は自分の目的を知ってはをらぬのだ！」ここでは明らかに詩作を天職として与えられたと確信する中也が、高みに立って、ただ平凡に生き、義理だの人情だのにひきずられている人群をあざけりののしている。虚勢とも倨傲ともとれる。しかし自分をその位置におくことが彼の揺ぎない信念だった。そこに彼の詩業が生まれ、不幸が生まれた。彼が世界を眺める姿勢、そこには、「強い独創的な自分」、「弱い雷同的な他人」、という簡明な哲理が潜んでいる。他人との間にはすでに埋めつくし難い深い溝がある。とすれば頼れるのは自分しかない。その自分が取り纏めるただ一本の手綱は自身の詩でしかない。こちらから求める孤独、その孤高な思索の中で研ぎ澄まされる詩。またそのやるせない淋しさから生まれる詩。「汚れつちまった悲しみに／今日も小雪の降りかかる／汚れつちまった悲しみに／今日も風さへ吹きすぎる」。こんな平明に書かれた詩の中に、彼の人生の癒やしがたい哀傷が感じられる。

自分がこの世に存在する理由、それを彼は詩に求めた。終生詩作の他に何の仕事ももたなかった彼の心には、詩人こそ私の天職だと考える敬虔な気持ちがあったからだろう。彼にとって詩人として生きることは、もう他に選択肢のない一本の道だった。その道を彼は一散に歩いてきた。歩いてきた道程の中に、胸をはり潤歩しながら口ずさんだ詩が残り、またともすると気弱になりがちな心が、後を振り返る時に呟く詩が残った。この二つの詩の混在が彼の詩集の基調を成しているように思う。迷うことなく詩人として歩んで来たはずだった。それだからこそ今の自分がある。そう堅く信じた中也も心の奥底では、孤独な自分の不幸を感じている。その不幸を招いたのは他ならぬ自分自

身である。どこにもやり場のないやるせない感情。早熟な詩人とは、実はあまりに早く自身を限定しすぎた悲劇をも意味していた。

冒頭に掲げた、「寒い夜の自我像」の一節の中の「一本の手綱」には、一散に我執だけを追いかけた中也の姿と、いま一つ、もうひどく弱って他に縋るものがないままにしがみついた中也との、この二人の中也が、この手綱、つまり詩作という確かなものにぶらさがっている。前向きに生きるにせよ、後をふり返り後悔しながら生きるにせよ、彼にとってよりかかれるものは詩でしかなかった。そんな率直な心情がこの詩に溢れるように表わされているように思う。詩は続けて物語る。冬の寒空の下をそぞろに歩く中也の孤独な胸の中に今、ほのかな心の灯火が揺れる。その火はかつての我執の炎とは違って、遠くで聞こえる心傷ついた人々の呟きが彼の心に灯らせている。他人の悲しみに共鳴し、見知らぬ女たちの哀しい歌声も、彼には自分に科せられた罰と感じとっている。そんな偽善めいた感情が、今の怠惰な自分自身を諷めている。数少ない自己反省の詩の一つである。死に至るまで自分と他人との間に横たわる溝に執着した中也も、心の深奥で他人との諧調に深い憧れを感じていたのだろうか。そう考えるとこの「寒い夜の自我像」は、やりきれない詩人が自分自身にたむけた鎮魂の詩なのかもしれない。

## 「どくとるマンボウ青春記」を読んで

3 MB 柿田佳男

私はこの作品を読んで、作者の若さとエネルギーに満ちた青春に多くの共感と笑いを誘われた。青春とは人生の春の時期であるように、自己自身の人生を歩む上での準備や活動を開始する、いわば第二の誕生の時期だと思う。彼は、学生生活に人生の全精力を使い果たしたと述べているように、熱く燃焼しながら生きていたことがわかる。

作者の旧制高校時代は、戦争がまだ続いていたが、彼らは、それを長い休暇とみなして一步距離をおいて見ていた。戦争という異常な状態において、彼らは学徒動員の勤労を少しでも怠けようとしている。戦争の緊迫した当時としては考えられないことを大胆に行っていた。これは、彼らが世に同調しないで、自己の理想を純粹に生きていた証拠だと思う。彼らの生き方に関して言えること

は、彼らは何物にも流されない情熱を貫いたということだ。

彼は、なぜこのように情熱を傾けて青春を燃焼させたのか。その一つとして寮でのエネルギーに満ちあふれた生活がある。彼らは、自治によって寮を管理していた。当時は食糧事情が非常に悪く、自分たちで買い出しに行き、それぞれが自炊していた。彼らの生活は、蛙を食べるほどの苦しいものだったが、相互の信頼感によってしっかり結びついていった。彼らは食物だけを求めていたのではない。心の糧も同様に激しく求めていた。彼らの心の底には、青春の悩み、孤独、疑惑などが常につきまとうっていた。このような心境を、彼は歌にしていた。こうした若者としての悩みは、彼と私との間にある四十年という長い時代の隔たりを全く感じさせない。

彼の文学に対する最初の衝撃は、父・茂吉の短歌から受けた。彼は度々、茂吉の歌をこっそり筆写し、ことさら感傷的な作を好んでいた。このように、父が彼に与えた文学的影響は計り知れない。また彼は、茂吉が彫像のように動きもせず苦吟し、全身をふりしぼるように考えこんでいる姿を見たとき、深い感銘を受けた。彼は、高校時代物理などの答案に短歌や詩を書くなどの若者らしい茶目っ気があったし、友人と同じような自由奔放な生活をしたが、しかし自分の内面を充実すること、孤独に言葉を綴ることを忘れず、徐々に文学的才能を蓄積していた。大学は、父の強い勧めで医学部に入学したのにもかかわらず、物書きになろうと決心していた。彼は、作家になるために大学ではあまり勉強しなかったようだが、人生の目標を常に忘れることなく、人生の本質を見る努力は真剣であった。このように、筋を通して生きていたことに感心する。私たち現在の若者にも大切なことだろうと思う。

こうして成長しつつある彼に、父茂吉が手紙を書いた。それは「宗吉は詩を書いているそうだが、一度父にも見せて下さい」と気弱な丁寧な文句だった。彼は、かつての怖い父の言葉に比べて茂吉も老いた、もう長くはないと心に言いさせた。茂吉は文学と生活を両立させる苦勞を知っていたので、子に文学をやらすことに猛反対してきた。しかし茂吉も、自分の若いころの歌を「いのちのあらわれ」として作った衝動のようなものを息子に見たに違いない。彼もそれを感じ取ったのであろう。だから、父が亡くなったとき彼は、父が自分

に対して抱いていた愛情に気づき、彼自身も父に対して強い愛と尊敬を持っていたことを改めて反芻したのだ。

このように父子の強い心の絆があったからこそ彼は作家になりえたと思う。

彼が、このように人間味あふれ、しかも自己の道を真剣に探る青春を送ることができたのは、人間性豊かな旧制高校生活、寮生活での友情と自由、そして父の愛から出た厳しい束縛を受けたためだと思う。自由奔放と束縛、この相反する二つのものに磨かれ鍛えられることによって、彼は青春の日々、自分の人間性を一層幅広くはぐくんで行ったのだと思う。

## 「ビルマの豎琴」を読んで

4 C 小川 洋

隊を捨て、友人を捨て、祖国を捨てた青年兵水島が、遠い異郷の地ビルマで僧としての生活を始めた。戦友のいる街に来て、私情を抑え、身分を隠しながら、ビルマ中をひたすらに戦没者を葬るために、来る日も来る日も歩き続けた。

このビルマという国は僧になれば生活に困ることがないので僧になった日本兵が多くいるというが、そのほとんどが捕虜になり働くのがいやで脱走し、そして生計をたてるために仕方なくなったのである。しかし水島の場合は違う。彼は終戦を知らずに戦う同胞の無駄死にを防ぐという任務を実行した帰路で、至る所に無惨に散らばっている多くの戦没者を見て、痛切な悲しみに動かされて彼らを家族の代わりに弔おうとした。隊に戻って皆と一緒に帰国するという自分個人の幸せを捨ててまで僧になったのである。

彼の決心は非常に堅かった。隊長の必死の試みにもかかわらず、彼は心を変えなかった。うわべだけでなく心の底から決心して、この地に骨を埋める覚悟であった。だからもし、父母達の生存が確認されたとしても、また「帰れ」との催促の手紙を貰ったとしても、彼は決して日本に戻らなかっただろう。彼が身をもって戦った戦争は彼をこのように変えたのである。そして彼はほとんどすべての宗教、いな全人類の願望に共通する隣人愛というものの本質を悟ったのである。

ある人が「私は隣人愛を持っています」といくら言っても、所詮それは「自分あつての隣人愛」と

いう立場に立っている。したがって「隣人愛あつての自分」という立場に立っていないのがほとんどである。しかし、水島の場合は隣人愛のために自分を犠牲にしたので「隣人愛あつての自分」という立場に立って行動しているといえる。三角山へ犠牲者を少しでも減らすためにビルマに日本兵を説得に行ったのも、戦没者を弔うためにビルマ中を駆け巡ったのも、まさに「隣人愛あつての自分」という精神があったからこそ出来た行為である。

また、彼は自分を狙ったイギリス兵の葬式にも参列している。つまり彼にとって、弔う人々が日本人であろうが、イギリス人であろうが関係なく、すべての戦没者に平等に祈りを捧げているのである。ということは、彼にとっての戦争が上からの命令だけであつて、相手に憎しみを持ったものではないということが言える。

このことは水島だけではなく隊全体に、またイギリス兵、インド兵そしてグルカ兵にも言えるだろう。だから隊が戦闘寸前に追い込まれた時にも歌によってお互いの心が鎮まり、戦闘が起ころず、遂には敵味方が混じり合つて同じ火を囲み、合唱が始まったのである。

異国の人が、それも少し前まで敵と信じ込んでいた兵士達が互いに言葉を交わし、歌を歌い始めた。つまり彼らも多少なりとも隣人愛を持っていたのであるが、それが戦争という狂暴なものによって消されてしまったのである。そして憎しみを持たない相手を殺すために駆り出され、捨て駒のように使われ、散っていくのである。

このような愚かなことが、歴史上最も安定している現在にも存在しているのである。軍備を競い核兵器を保有する。そんな国が至る所に存在する。一触即発の危険をはらんだ世界、どこか歯車が狂つてしまえば終わりであるのに、それぞれの国は構わず軍備を増強している。

そのために今、世界はどうなっているのだろうか。平和を維持するという名目で軍備を雪だるま式に増強させているが、これは平和を維持するというよりも、むしろ国家間の緊張を高め、世界を崖縁に追いやっているようなものである。もちろん、軍備が役に立つ面もあるだろう。しかし今は、それ以上に無駄が多過ぎる。地球を何千回も焼き尽くす程の核兵器は必要ないはずである。

それに比べて水島はまったく無駄なものを持たず、持っていたのはただ一つの豎琴であつた。換

金してもたいした額にはならない廃物利用の豎琴、それでも彼の生活に欠かすことの出来ないものであつた。通信に利用して隊を先導したり、宴会で人を楽しませたりした。

多額の金をかけても無駄なものもあれば、ほとんど金を使わないが非常に役立つものもある。この食い違い。我々は物事を見直すと共に、世界平和について新たな認識を持つ必要があると思つた。

## 「裸の王様」を読んで

1 C 中西圭子

「ぼく」は、太郎君のよろいに覆われたような心を初めのうちどうすることもできませんでした。それを堤防の一角に穴が開いたことをきっかけとして、それから手さぐりで太郎君の本当の心に触れていきました。その時の太郎君の気持ちはどうだったのだろう。「ぼく」の心と触れ合っていくうちに、今まで感じたことのない何かを太郎君は感じ取つたのではないだろうか。

この何かとは、きっと人の優しさにちがいないと思う。それともう一つは、「ぼく」のやっている画塾のアトリエの中で太郎君は初めて自分の存在感を知つたことだと思ふ。「ぼく」にとつてもこれまで画塾で接してきた他の生徒たちとの間には、生じたことのない心のつながりを見つけたのではないだろうか。太郎君は初めのうちは、やっかいな生徒だったにちがいない。けれども、ダメな子ほどかわいいという親のような気持ちを「ぼく」は感じたのではないだろうか。

太郎君が「ぼく」を慕う心と「ぼく」が太郎君をかawaii、いとしいと思ふ心が微妙なバランスで絡み合い、最後には太郎君が自分でよろいを脱ぎ捨てるまでに至つたのだろう。

書名の「裸の王様」というのは、太郎君が心のよろいを脱ぎ捨てたことによって無防備の裸になり、本来の子どもになつたという意味も含まれているのだろう。もうそんなよろいなんか着なくても立派にやっつけられるようになった太郎君の心の成長を示しているのだと思ふ。

私は、この作品で自分を脱皮して思つたままの「裸の王様」の絵をかいた太郎君と、コンクールでいい成績をもらおうと見せかけの絵をかいた多くの子どもたちが対照的に描かれていると思つた。親や教師たちに気に入られようとして、自分の心



を偽り、大人の世界のどろどろした醜いものにすっかり染まっている子どもたちがかわいそうに思えます。そんな子どもたちの描いた絵の表面だけの美しさに高い評価を与えた審査員たちもあわれだと思ふ。もし私が絵をかかされる立場だったらどうだったろう。きっと大人の気に入るような絵、つまり自分の心を偽った絵をかいただろう。私が審査する立場になっても同じように偽りの審査をいただろう。絵をかくということだけでなく、読書感想文を書くということについても、素直に自分の思ったこと、感じたことを書くのではなく、提出するために、人に好かれるようなことを書いてこれまで提出してきた。私もこの作品の大人に気に入られるように絵を描いた子どもたちの一人なのだということが分かりました。人には知らず知らずのうちに他人に自分をよく見せようとする心があることも今さらながら思い知らされたような気持ちである。

この作品を読んで「ぼく」との心の触れ合いにより自分の心のよろいを脱いだ太郎君、その汚れていない澄んだ心と、子どもたちの自分を偽る心とを対照させることによって、子どもたちの醜さが強調されているような気がしたが、そのように、まだ小さな子どもたちを醜くゆがめた今の社会についても考えなくてはいけないと思った。

角川文化財団主催「読書感想文  
コンクール」入賞作品

## 「それから」を読んで

2 M 佐藤公美

愛し愛されることは、幸せですばらしいことだと普通は思いがちです。しかし、愛が深ければ深いだけ、悩みも苦しみも深く大きくなるを得ません。この小説を読んで私は、人間として真実の愛を貫きとおすことがいかに辛く、厳しくしかしすばらしいことであるかを考えさせられました。

主人公の代助は、学校を優秀な成績で卒業し、三十にもなるというのに、親から生活費を貰ってもらって、のうのうと遊び暮らしています。「食うための職業は、誠実には出来にくい」とか「自分の技芸のために働くことこそが真の労働である」などという独特の職業観を抱いているからです。

そうした彼の考え方が変化するきっかけになっ

たのは、三千代の出現でした。代助には、かつて三千代に好意を抱いておりながら、親友平岡のために譲ってやり、自分が犠牲になったことを誇りに思う、輝かしい過去があったのです。しかし、その平岡・三千代夫婦は、子供の死や平岡の放蕩をきっかけに仲がうまく行かなくなって三年ぶりに代助の前に舞戻って来ました。三千代の不幸せを知って代助は、三千代への愛を急速に深めて行きます。親友の妻である女性を好きになるなどということは、それまでの代助には考えられなかったことです。しかし、今の代助は、過去の自分を偽善的であったと反省し、自己の自然に、素直に従って生きようと考え始めるのです。

彼は、三千代との愛を貫くために、父から押しつけられた結婚話をきっぱりと断ってしまいます。生活費を打ち切られるのも覚悟の上のことです。自分の運命を、自分の力で初めて変えようとしたのです。家族や社会から見放されても、今こそ真実の道を歩み出したのだという自負の念が、彼を満足させます。代助は、自分の生を自然のままに愛するというに激しく感動し、それを正しいこととして見つめ出したのです。

これまでの彼は、家族や社会の人間関係のすべてにおいて従順に生き、それが一番良い方法だと信じていました。生活のために働くことは、自己の理想や信念にもとることであり、彼はただ、美的に生活を楽しみ観念の世界に遊んでいればよかったのです。

その彼が一変します。女の強さが、彼に「職業を探しに行ってくる」とまで言わせたのでしょうか。三千代の断固とした決意や勇氣には、驚かされ感心させられます。愛することは、こんなにも強く雄々しいものなのでしょうか。二人は、互いの存在に支えられて、はっきりと自己を表明し、勇氣をもって強く生きようと精神を燃え立たせます。

それに対して、周囲の人たちはあまりにも冷たすぎます。平岡にしても、ただ自分の名誉を気遣うだけです。三千代を心から愛しての結婚生活であったのかどうか疑わしいほどです。代助の父や兄にしても、たとえ代助の行為が反道徳的なものであったにせよ、彼の人間的な成長を喜んで援助をしてやるだけの雅量があっただけで私には思いません。

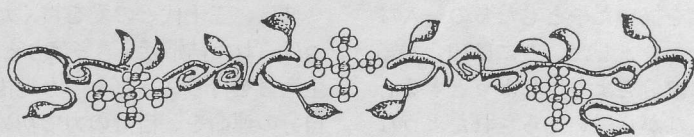
三千代の病気が悪化したことは、代助の気持ちをさらに追いつめて行きます。しかし、それでも彼は、三千代と生死をともにしようと決心します。

赤い物体が彼の頭の中に次々と飛びこんできて、ぐるぐると回転し始めます。彼の精神は、それまでの静穏な状態から、激動の状態へと移動しました。それは、彼の新しい出発をも意味しているのでしょうか。敏感な精神の持ち主には、赤は激しすぎて不安感を抱かせる色だと感じていた主人公だからです。

代助と三千代の愛は、周囲の人々を不幸にしたかも知れません。二人の苦悩も深いのです。しかしそれだからこそ、この小説は、真実の愛とは何かが深く追求されているのだと思います。世間や

社会を安定させ維持させることだけを目的にした偽善的な愛こそ、名誉欲や出世欲がからんでくるだけに、かえってゆがんだ人間関係を作り出し不幸をもたらすのではないのでしょうか。真実を全うするまでの主人公の心の中の葛藤は、まさにこの矛盾を乗り越えることにあったのだと思います。

これから先、三千代は病死するのではないかと、代助は零落するのではないかと考えると哀しくなってきました。しかし、二人の美しい愛は、私に強い印象を残して、いつまでも忘れられない作品となりました。



## 図書館委員会この一年の活動

学生諸君は担任の先生や教科担当の先生方とは日頃なじみ深いものの、図書館委員会の先生方のことはあまり知らないと思います。この機会に何をやる委員会なのか、これから何をしようとしているのかを中心に、この一年間の活動状況を報告させていただきます。

### 〈図書館委員会〉

各教科選出の委員8名と庶務課長によって構成されています。60年度は田中富士男先生が委員長でした。もちろん、図書係長の山口さんも幹事役として参加されています。そして、

1. 図書館の業務計画に関する事
2. 図書館の保守整備に関する事
3. 図書の選定に関する事
4. 視聴覚教育関係施設、設備に関する事
5. 読書指導に関する事
6. 研究紀要の刊行に関する事
7. その他委員会が必要と認めた事項

を審議し、実行していくことが委員会の任務です。このため、図書部会、視聴覚部会、研究紀要部会が設けられ、委員はどれかの部会に所属して活躍しています。重要な問題は毎月1回開かれる定例委員会で審議され、決定事項は教官会議に必ず報告されます。

本年度もいろんなことに取組んできました。学生諸君にもっとサービスができるようにと考えて、図書室にパソコンを購入し、図書の管理、貸出し、検索などの作業を合理化することを始めました。例年のごとく、国語科の先生と協力して、読書感想文コンクールを開きましたし、秋の読書週間には「ハレー彗星」というテーマで、本の収集展示などを行いました。「コンクール」の方は学生諸君の努力のおかげで、優秀な作品が沢山あつまりました。最優秀の谷口甲二君をはじめ入選者は1月の始業式で表彰されましたが、惜しくも選にもれた諸君の中には来年を期している人も多いのではないかと考えています。教養不足な(?) 専門家の先生からも、こうした催しは有難いという声をよく聞きます。読書を通じて自分を高めていく努力や豊かな表現力を養うことは、5年生の就職試験に最も役立つことだし、(ち

なみに最近の入社試験では面接と作文の比重が大きいそうです)、何よりも読書を通して「自己の確立」を図ることが大切です。ただし、最近は応募数がやや低落気味なので、来年は全員参加を是非実現して欲しいと願っています。

こうした背景もあって、「読書週間」のテーマは従来とは違った観点から設定してみました。いかがでしたでしょうか。最近のトピックスをもとに、1人でも多くの人に読書に興味をもってもらおうという趣旨はよかったようですが、準備不足もあって大成功とまではいきませんでした。乞うご期待、来年に！

さて、蔵書数はともかく「図書室が狭い」「もっと利用しやすく」「読みたい本が少ない」etc. の不満は沢山あるだろうと思います。根本的な解決までにはいろいろ問題もあるでしょうし、時間もかかりそうですが、来年度以降の大きな取組みとして次の2つがあげられます。

#### (1) 図書室の改修整備

毎年2,500~3,000冊の書籍が増加している中で、昭和50年に建てられた本校の図書館は手狭まになってきました。とくに閲覧席は今でも不足気味で、新学科が増設される来年度以降はますます不自由になりそうです。そこで、現在の図書室(440㎡)をせめて700㎡以上に広げたいと考えています。

また、フィルムライブラリーの充実や種々のサービス向上などの具体案も今後検討していく必要があります。

#### (2) 図書室の積極利用

「最近の学生は本を読まない」、「図書室の利用が少ない」などのお叱りを多くの先生から頂いています。貸出し冊数などの統計をとってみますと、決して全国高専の平均値に負けてはいませんが、レポート、宿題などで専門書を利用する以外は、ややもすると軽い本、楽しい本……に読書傾向がかたむいているようです。いずれにせよ図書室をもっと利用しやすく、読書の質と量を高めていく努力が大切だと思われます。そのため、今後は学生会の図書委員会(君のクラスの委員は誰だった?)と力を合わせて、いろいろ工夫していきたいと考えています。昨年は1年生委員にはカウンター業務などを手伝ってもらいましたが、単なる手伝いだけでなく、学生諸君のアイデアと実行力を大いに期待しています。

なお本校では「学生必読図書100選」を定めてあります。このうち何冊読んだか友達どうしで是非競いあって下さい。委員会では目下「新100選」も検討中です。

#### <図書部会>

図書室関係の予算をたてたり、購入図書の選定などを行いました。読書指導にも力を入れたいと思って、委員が毎日昼休みには交替で図書室に詰めることを約束しました。さて、実行の方はどうだったでしょうか。「あまり先生方の顔は見なかった」、「目障りだった」、「もっと話しかけて欲しい」、「あまり話しかけるナ」等々の声を聞かせて下さい！

9月には新しい試みとして、「赤西蛸太一見る、読む一」を実施しました。国語科の細井先生のお力添えもあって、参加して下さった方からは好評を博しました。ある先生からは「今まで高専には教育と研究はあっても文化活動が皆無であった。新しい芽を是非育てて欲しい」という大層な励ましを頂きました。そこまですぬぼれてはいませんが、来年度もいろいろ計画していきたいと思っています。

#### <視聴覚部会>

今までは視聴覚教育関係の器材の購入整備に力を入れてきました。今後はフィルムライブラリーの充実、独自のテープ、フィルムの製作などにも取組む予定であり、種々の観点からの計画案を検討中です。

#### <研究紀要部会>

図書室の入り口近くに沢山の大学の研究報告書が並べられているのはご存じでしょう。本校の先生方の研究成果も専門の学術雑誌に掲載される以外に、「奈良高専研究紀要」にまとめられ、全国の大学、高専、研究所に送られています。学生の皆さんには少し難しい内容かも知れませんが、多忙な先生方が研究活動をおろそかにすることなく、立派な研究論文を産み出しておられることを誇りに思ってください。本年3月に発行される第21号には、21名の先生方の論文がのっています。

なお、奈良高専のPRにもっと役立たせるために、今年からは県下の図書館などにも贈呈する予定で

す。もし君が住んでいる街の図書館で見かけなければこのことを教えて下さい。すぐに送る手筈をとらせて頂きます。また、先生方の研究内容をわかり易く解説した「本校の研究紹介」というパンフレットをすでに作成しています。興味のある方は、図書室カウンターでもらして下さい。

最後に委員の先生方を紹介しておきます：田中（物理）、溝端（英語）、関口（機械）、宮本（応物）、宮田（電気）、京兼（電気）、河越（化工）、大植（化工）。

図書系の山口さん、福井さん、桑原さんの熱心なご協力には委員一同深く感謝しています。

この報告文は委員会全体のまとめではなくて、図書館だより第20号の原稿〆切に追われて、委員の一人が走り書きしたものです。資料を見ずに書いたので間違っている部分もあると思いますが、学生諸君と図書館を結びつける一助になれば幸いです。

図書館委員 機械工学科 関口秀夫

## 〔20号に寄せて〕

# 創造の泉を備えるために

国語科 小谷 稔

奈良高専には文化がない、とある教官が言ったことがあった。もう10年くらい前のことであつたがなぜか忘れられない。文化とは何かということになればことはめんどろである。縄文文化などというように、まだ単純なものもあれば現代文化のように複雑なものもある。ここでは狭義に解釈して高専という一つの集団としての文化活動がないと言えようか。もっとひらたく言えば、学校の中で相互に人間性を豊かにしていく活動がないということになるろうか。動物が文化を持たないように私たち人間もパンのためだけの仕事や勉強では「文化的生活」というわけにはいかない。この教官の言葉の真意はとらえがたいが大体こんな意味ではなかろうか。そう解して私もこの言葉に同感するのである。

縄文期の人々が実用のための土器に非実用の縄目を印したように人間は実用だけで満足するものではない。この心はいわば無駄なものに価値を認めている。現代の若者がTシャツを小さなワンポイントによって選択する心と同じである。そのワンポイントに大部分の金を支払うのである。このように人間は、実用だけでは満足できないものであるから学校生活においても義務としての勉学のうえに、何かのうるおいが必要であろう。そのうるおいが「文化」であると言ってよい。

諸君の市町村にも苦しい財源の中からかなり無理をして立派な公民館や体育館などの施設が造られているであろう。これは現在の豊かな社会にあって地域の人々が、それまでの物的なものの欲求が一応満足されてその次の段階としての文化的満足を求めていることのあらわれである。人々は多様な文化的要求を強めているわけである。そこでは多彩な催しがなされて、コンサートや演劇、講演、歴史講座や文学講座、また書画や写真、手芸展ほかさまざまな文化的行事がある。本校の施設で言えば、読み、調べるための図書室と新しい凌雲館がゆとり、うるおいのための文化的施設ということになる。市町村の公民館が女性を主力とする中高年の人たちによってにぎわっている様は目を見張るものがある。それに比べて確かに「奈良高専には文化がない」と言うのは当たっている。学校というところはプログラムがちりしているので、ゆとりの生み出す文化が育たないという面がある。しかしそれは差し引いても現状は寂しい。現在のカリキュラムはゆとりを生むために旧課程の時間数を減じたものなのである。

奈良高専創立の1964年、つまり60年代は「黄金の60年」と呼ばれるように日本は経済成長が目覚ましく、豊かな生活を目指しつつ働きに働いた。このころは学校も活気があって勉強もよくしたが学校への不満も多かった。その一方で学生会が映画会をやれば多くの学生が集まり、教官を囲むゼミナール会が何回も開かれた。個人的にも印象的な学生がいた。彼は間を置いて2回留年したが卒業の時には首席であった。朝早く登校して1人で教室の掃除をし、学生服で通した。また別のある学生は私が家庭教師のアルバイトを紹介したら「夏目漱石全集」を学生時代の記念に買う資金にと言っていた。そういう意志的に目標に生きる学生がいたものである。「黄金の60年」代で目指された「情報化社会」は急速に

進んで現在は60年代に求められた「量」ではなく「質」が問題にされ、「猛烈」よりも「ゆとり」が求められている。人々は個人の好みを優先して60年代のような共通の目標が見失われ、個人の生き甲斐もつかみにくい時代だといわれる。学校生活でも個人を超えた学校、学級、クラブという集団に帰属献身するという傾向が低下してきているようである。では反対に個人として生活をどう充実させているか、「ゆとり」をどう生かしているか、それを自分にきびしく問わなければならない。

諸君も知っているように「高専」は、民間の専修学校と混同されやすいという。それが名称だけの混同であるうちはまだよい。学生のもつ情報の量や質まで混同されるとしたら諸君はどう答えるであろうか。学校のプログラムの消化とその発展深化にもっと意欲的でなければならない。また非プログラムとしての文化的活動つまり教養の拡充は、今すぐ役に立たなくとも将来の創造のひらめきを生み出す豊かな泉を備えることになるのである。無気力なその日暮らしは無為の老人のものであって青年のものではない。

## 病床に本を読む

図書委員長 物理科 田中 富士男

思わぬことで入院して学生諸君や同僚の皆様にご迷惑をかけることになった。昨年11月26日の入院から2ヶ月も経った。全く自覚症状がない病気だから（少し疲れ過ぎかなという程度は自覚していたが）病院生活もそれほど苦痛ではない。健康なときに1月位休養のために入院できたらよかろうなどと、考えていたのだから、こんな結構なことはないと、強がりもいいたいのだが、そうでもない。

苦痛の第一は、好きな時に好きな所へ行けないことだ。みたい映画の試写状をもらっていても、どうにもならない。例年なら年末12月の中頃には正月映画はほとんど見ているのだが、今年は相当見落している。毎日、新聞や映画雑誌を見ながらいららしている。これでは体にもよくなかろうと思ったりもする。

しかしメリットもないことはない。ある程度本を読めるのがそれである。ベッドに寝ているのだから書くことはできないが、読むのは読めるわけだ。入院以来読んだのはいくらかもあるが、まとまったものは、岩波新書を何冊かと伊丹万作関係の本であろう。

学生時代、京都・国鉄二条駅前の下宿から大学までの市電での行き帰り、下宿の主人の持っている岩波新書（下宿の主人は岩波新書を全部発行の都度購読していた）を片端から読んだものである。今回はそこまでは行かないけれど、一例をあげると「西部開拓史」「モスクワ特派員報告」「虫歯はどうしてできるか」「日本の国鉄」……と、わが雑学の基礎は岩波新書であるといえる。まことに岩波新書は本の題目になっているテーマを、要領よくしかもその時代の関心にこたえた深さでまとめ上げており、その本の著者の学識と岩波のプロデュースの能力が一体となって、ついつい読みふけてしまうのである。

伊丹万作は昭和初年から戦後すぐの頃まで活躍した映画監督であるが、私はこの人の「赤西蛸太」をみて以来そのとりこになった感がある。この作品は昨年学生諸君にもビデオでおみせしたのだが、日本映画の歴史にのこる秀れた映画であり、この伊丹万作の子息が「お葬式」や「タンポポ」を監督した映画俳優の伊丹十三であることは、ご承知の通りである。昨年春私は「伊丹万作全集」（全3巻）を購い棚にかざっていたのを、この機会に読んでこの人のとぎすまされた文明観、映画への情熱に感動を覚えたもので、それからさらに最近出版された「映画作家伊丹万作」（富士田元彦）を読もうとしている。

一方では広く浅く岩波新書から知識を得、他方では一人の過去の映画人のすべてを知りたいという欲望、これがとりあえず入院中の私の読書の傾向であろうか。何れも専門の物理学に関係はないけれど、何かの役に立つこともあろうか。学生時代の読書が、今の私の知性（ありとすればの話であるが）の基礎を形成するのに役立ったように。

## 本との出会い（その一）

化学工学科 犬田 修正

これまでに読んだものの中で、未だに頭のどこかに生き続けているのは、小学校の頃、気まぐれに父が買って来てくれた“子供の科学”の中の「山は生きて（動いている）」という記事で、山は動かないとばかり信じ切っていた子供心には驚異であった。

また、たまたまわが家を訪れた叔父が“火の科学”（著者は思い出せない）という本をプレゼントしてくれたのであるが、この本はとても面白かったのでくりかえし読んだ。もし、複製版ができれば、もう一度買って子供達にも読ませたい本である。ファラデーの“ロウソクの科学”などは名著だと多くの人がすすめてくれるし、僕もそう思うが、前者の方が火（熱と光）に関する話題が豊かで幅広く、その中には「冷光」や「不知火」のことまで書いてあり、わかりやすく読みやすかった。

こつこつ貯めた小遣いで初めて手に入れたのは“ロビンソンクルーソー”であった。これも夢多く、好奇心の強い子供心を楽しませてくれた。

中学校の頃には“太陽”“アルプスの氷河”など自然科学系のものの他、文学書などを乱読した。

ちょっと妙な話しになるが、その頃習っていた生物学は分類や形態などが中心で、点数はまあまあ取れたが心底から好きになれなかった。ところがである！ 徹頭徹尾暗記する教科という、それまでの自分の生物学に対する偏見を見事に根底からゆさぶり、打ち砕いてくれたのが、何とそれも友人から1週間ばかりの期限付きで借りて読破した受験参考書“生物の研究”（旺文社）であった。この本を読んで生物学というものはこうであらねばと思ったし、これなら自分も好きになれそうと思った。ここで自分に関わる秘密を打ち明けると、実はこの本の著者は昭和20年前後文部省初等中等教育局の理科部門の要職にあり、当時の日本の理科教育をリードした佐藤和韓鶏という、当地旧制郡山中学出身の生物学者であり、縁というものはまことに不思議なもので、今の自分にとっては義理の叔父なのである。後で知ったのだがこの著者は植物学の専攻で、第二次大戦前に発行している著書の中で、科学（理科）教育のうちでは物理、化学にくらべて生物学の教授法はまだ未開拓であり、未完成であると述べ、その当時の生物学の状況は、素朴なる博物学時代から、分類学中心の時代を経て形態学流行時代に到達し、さらに生態学時代に移行していると述べている。そして日本では形態学万能時代の残骸が未だに香り豊かに残っているのは果してよいことと言えるかと疑問を投げかけている。さらに欧米の理科教育の思潮を比較検討し、特に現実と理想の調和に立たんとするアメリカにおける生物学教授の方法論に注目し、多大の興味と関心を示し研究している。生きた自然の具体的な場において教育される者の自発性と興味とを教育的に充分に考慮しつつ行わねばべきであると主張している。これは正に戦後の日本の理科教育の先駆者的見解とでもいうべきものであり、卓見であると思う。なお、この著者の兄（広島原爆で亡くなっている）も動物学専攻の生物学者で、佐藤井岐雄著“日本産有尾類総説”（第一書房）は、昭18.3.30初版の本で絶版であったが、昭52.10.15に複製版がだされ、今もその方面の研究者に利用されているようである。

今から思えば、当時の僕は生意気にも static な生物学に納得できず、dynamic な生物学を求めているようである。（未完）

## 酔 生 夢 死

数学科 入 江 隆

何年前か、誰であったか残念なことに名を忘れてしまったが、有名なプロ野球選手が、座右の書を問われて「菜根譚」とこたえているのを、新聞か雑誌かで見たと。そういう本があるのかと思って書店で探したが見つからず、代りに目につき、これでよいと買って帰ったのが、吉野俊彦著「菜根譚の読み方」（徳間書店）である。「菜根譚」からの抜粋に註釈を付けた本である。パラパラと目を通して本棚にしまい込んでいた。原著は中国の明の時代の終り頃、洪自誠という人の書いたものであるという。しかし

彼については詳しいことはわかっていないで、本名か否かも不確かであるけれども、相当な学者で官僚であったらしいという。そしてこの本を吉野氏の敬愛する森鷗外も読んでいたに違いないということである。そうして鷗外は、酔生夢死の人生は絶対にいやだと役所から帰宅後、寸暇を惜しんで書を読み、文を書いたそうである。陸軍軍医として最高の地位にのぼり、また明治、大正を通じての日本有数の文豪といわれる鷗外がである。念のために一言説明すると、「酔生夢死」とは「何ら為す所もなく一生を徒らに終ること」である。この冬休みに本棚から引っぱり出してまた頁をくってみた。「天地万古有れども、此の身は再び得られず。人生は只だ百年、此の日最も過ぎ易し。幸に其の間に生まれたる者は永遠であるが、自分が一度死んでしまったら再び生きることにはあり得ない。人生は長生きするとしてもせいぜい百年であり、月日の経つのはあっという間である。この世に生を受けた者は生きてよかったと言えるだけの一生を送るべきであり、無為に一生を終ってはならないと、絶えず心を引き締める必要がある。」ということである。新しい年の初めにあたり、私も鷗外や洪自誠の生きる姿勢を忘れないでいようと思ったことである。広い構内に立派な建物が並び、学生諸君はこれまた立派な設備を使うことができ、すばらしい先生方の指導を受けることができる。ここに生活できる間にやっておかなくてはならないこと、身につけておかなくてはならないことを常に忘れないでほしい。卒業して仕事についてからも、「酔生夢死」という言葉を思い出してほしいと思います。皆さんの人生が、生きてよかったと言えるようなものであることを祈ります。

## 本 と の つ き あ い

化学工学科 石 垣 昭

近頃、本を読みかけても最後まで読み通す根気が少なくなり、再度読みかけては何処まで読んだかを忘れ、最初から読み直しては中途挫折するということを繰り返している。そこで昨年8月から、どこまで読んだか、これはと思ったことは何ページに書いてあったか等をその都度カードにメモすることにした。効果てきめん、年末までに20冊近い本を読み通すことができ、何を、何時、読んだかも一目瞭然となった。

その内容は私の研究に関するX線写真に関するものから、中国の考古学に関するものまで、極めて雑多で、やせ我慢で読み通した本もある。なかにはゲーテの“ウイヘルムマイスター”のように途中でほうりだしたままのものもあるが、西堀栄三郎さんの“南極越冬記”等大変感銘を受けた本もある。

だが、新年早々ショーペンハウエルの“読書について”を読んで反省もした。このなかの一つに重要な本は続けて2回読むべきであると書いてあったが、残念ながら昨年読んだ20冊のなかで、もう一度、繰り返し読んでみたいほどの重要な本はそれほど多くはない。本当に自分にとって大切な本とは長い年月をかけても、繰り返し読める本なのであろう。

——良書を読むための条件は、悪書を読まぬことである。人生は短く、時間と力には限りがあるから——  
ショーペンハウエル

数学科 笠 野 卓 夫

「図書館だより」も20号となって、ますますの発展、よろこばしいことです。昭和54年度に、図書館委員長をつとめさせて頂いたころは、まだ、この「図書館だより」も、発刊間もない頃で、第6号に、つたない一文を書いたことが、なつかしく思い出されます。

当時の図書館は、新館へ移って4年目、充実とともに、新しい問題点が次々と出てきたものでした。発展は、問題の克服の上にあるものです。歴代の委員長・委員の方々の御努力で解決をみていきましたが、さらに次の諸問題も出てきていることでしょう。今後の御尽力をお願いします。

早いもので、あれからもう7年もたっているのですね。この春、定年で、この学校を去りますが、在任中の図書館への思い出は、いつまでもなつかしく残ることと思います。奈良高専図書館の、「図書館だより」のいま一層の充実・発展をお祈りします。

## 心にしみる本

化学工学科 河越幹男

「感動した本」とか「ためになる本」とか本には色々な類の本がある。この中に「心にしみた本」を加えてもよいと思う。心にしみた本のエキ스는心の奥深くにしみこみ、時折、岩の割れ目からにじみ出た岩清水が岩肌を湿すように、からっからに干からびた心を湿らせてくれる。本を読むことの喜びの一つはこんな所にもあるように感じる。

本が心にしむためには、しみこませるだけの弾力と包容力が心になければならない。これらは何れも20前後の若い年代でなければ難しい要素である。「感動する本」とか「ためになる本」は、ある程度歳を取っても出会うことができるが、「心にしむ本」は青春時代に出会わなければ、その後で出会うことは難しい。乏しい私の経験からしてもこの事は言える。学生諸君も、どうか一冊でも多くの「心にしみる本」に出会って下さい。それは、きっと、長い人生において乾いた喉を潤す一杯の水となってくれるでしょう。

## 書くことと読むこと

機械工学科 小畠耕二

みなさん!! 自分の文章をどう思われますか。読みやすい文章? わかりやすい文章? 1度友達に読んでもらって感想を聞いてみて下さい。これまで作文や報告書など多くの文章を読ませてもらっていますが、何が言いたいのかよくわからず、頭をかかえることがあります。文章の構成のまずさや文法上の間違い。また誤字や脱字も気になります。悪文を読み返し、文章に対する疑問や不自然さを感じないとすれば、それは読むことの方があまりにも少なすぎるからだと思います。

良い文章を書くための手始めとして、まず本を読みましょう。自分も文章を書くのが苦手、大いに本を読みます。

## 科学雑誌

電気工学科 京兼純

昨今の映像時代を反映してか、目で見る科学雑誌が巷間に溢れて久しい感がする。なかでも高名な地球物理学者T氏が編集しているN誌などは、Timelyな話題を全ページ少女趣味とも思えるような絵や写真で埋めつくされているためか、破竹の勢いで部数を伸ばし現在に至っている。N誌がきっかけとなり、次々と美しい科学雑誌が発刊されているが、このN誌を凌ぐものは今のところ現れていない。一科学雑誌が引き起こした Epoch-making は計り知れないものがあるが、とりわけ若いOLを中心に大衆受けするのは少し前に流行った、科学の分野における「軽・薄・短・小」と言ってしまうと言い過ぎになるであろうか。それとも最近とみに言われているようになった「美・感・遊・創」の魁(さきがけ)なのであろうか。また一方では総合雑誌のC誌には『熱い科学の時代がやってきた』のなかで「科学のタオイストは揚子江を泳ぎきるか」などという高邁な題を掲げると同時に、種々のところで最近の科学の面白さを特集している。

このように、今では軟から硬と話題に事欠かなくなってくるものの、ほんの10数年前まではこうではなかった。本来科学雑誌は、解説と啓蒙という両面を担っているのであるが、これまでは功なし遂げた大先生が執筆し、対象者はその道のスペシャリストと呼ばれている人達であった。当然内容も解説とはいうものの難解な事柄を学術的用語というよりも、むしろ哲学的な用語に近いものを用いてより難しく、理解できるものは理解せよという態度で、不親切極まりないものであった。それでも読書100遍自(おのず)から見(あらわる)という勢いで読み進むと、なるほどこういうことが言いたかったのかという程度のものであり、読書後『ああやはり科学はロマンだな』という感慨の片鱗とてなく、鬱々とするだ



けだった。その点上記のN誌などは、深い学識を持ったT氏が透徹した分析で編集している関係上、最新の科学というものが目の上の鱗が落ちるように分かる仕組みになっている。

こうして硬軟取り合わせてあらゆる種類の雑誌が出回り、現代のコンピュータエイジにとっては、自分の能力に合ったものが選択できるようになった。非常に有り難い時代である。また逆に、選択の範囲が広すぎるためどれを選べば良いかと、戸惑うことがあるかもしれないが、その時その年代にあったものは絶えず本を読んでいると自ずと分かるものである。科学現象にしる数学にしる、色々なことを理解するというは何も背伸びをする必要はなく、自分のレベルに合ったものをじっくり読んでいくことなのである。ただそれだけである。

高専は15才から20才までの多感な世代を収容し、科学技術を教授する学校である。こう書き進めていくと、さて彼等を満足させるような図書を収納し得るに十分な場所を確保しているのであろうかと考えた場合、本校はあまりにも寒すぎるのではなかろうか。一図書委員としては、この20号記念誌を契機に教育・研究の中心でもある図書館の抱えている問題を、真摯に見つめて戴ければと思っている次第である。

## 読書の効用

機械工学科 宮 本 止 戈 雄

私達はいろんな事を知るのに、テレビや新聞、雑誌等をよく見る。しかし、知りたい事と同時に自分にとってはどうでもよい事も雑然として受け入れてしまう事も多い。その点1冊の本はある主題について書かれているので、それについて集中し深く考える事ができる。本を読むと、ただ書かれている事をそのまま受け入れるだけでなく自分はどう思うとかどうするとかいろいろ考える。今までただ漠然と思っていた事を意識の中にはっきりと引き出して私達の考え方をまとめてくれる。著者が長い時間をかけて見出した考えを、私達の考えと対比させ、その考えを受け入れるにせよ、それと対立する場合にも自分の考えをはっきりさせることで自分の思考の世界を一挙に広げることができる。こうして私達の世界観や人生論が形成されていくのだと思う。皆さんも若い間にできるだけ読書に励んでほしいと思います。新しく開けた世界に喜びを感じ励みになると思います。

## みえてきた図書館像

電気工学科 宮 田 正 幸

日本では現在、毎年6~7万点の図書類が発行されているそうです。しかもそれら全て国立国会図書館に保存され、現在の蔵書は既に400万冊以上に達していると言われています。勿論比較になりませんが、私達奈良高専の図書館も年2千~3千冊ずつ増え続け、現在5万冊あるそうです。しかもこれらを管理する人は昔のままですから今まで通りのサービスをしようとするとなん年々労が増えるのは自明のことです。学校全体をみると図書館の電算化が1番遅れている気がします。合理化を行うためにはコンピュータ化する必要があります。1番のメリットはその検索能力で、蔵書点検がスキャナーを利用してどんどん出来るということと、貸出、返却についてもカードによるスキャンが出来ます。各研究室にはパソコンが必ずありますのでこれらを使って学校全体をネットワーク化する。ホストコンピュータとしては事務用又は教育用の電算機が考えられています。このネットワークに図書館も組み入れデータの共用化が図られれば、かなりの合理化が達成出来るものと思われれます。本や物品の購入はこれらの端末を利用する。又非常に手間のかかる図書データの入力業者のMARC (Machine Readable Cataloging) 等データベースが利用出来る。こうなると私達利用者は大変便利になります。しかし蔵書の整理、ソフトの開発、テープ、ディスク等の保管等が新たな問題となって来ます。私達が便利なサービスを受けようと思えば、やはりそれ相当のお金と現在以上の人員は必要ではないでしょうか。

## 歴史書にも親しもう

機械工学科 水 嶋 巖

昨年、奈良高専の隣の地で藤の木古墳が発掘されて、馬具の装飾模様に関して注目をあび、今後の発掘調査に大きな期待がかけられています。また、その近くには法隆寺があり、学校からは大津皇子の悲劇を思い出す二上山も見えます。このように本校の近くには多くの史跡や古寺があり、本校の学生は考古学、歴史学、民俗学あるいは美術など幅広い教養を修めるのに恵まれています。そこで、単に工学の専門知識の学習だけに終らず、休日を利用して神社、仏閣、史跡などを訪れ、またそれらの手引書を読み、さらには歴史書、考古学の入門書などにも親しくなり、日本人の思想や生活の歴史も学んでほしい。

英語科 溝 端 清 一

最近では中規模程度の書店が結構増え、期待感を抱いてよく立ち寄ります。店頭に並ぶ流行雑誌類のコーナーの賑わい振りは、休日などさらに奥へ客を入らせない程です。しかし書籍数の多さにもかかわらず、何故か満たされぬ思いで店を出ることが多いのです。自分の脳裏に立ち込めた興味の霧の実体を、何とかして掴み取りたいという焦燥感にかられて書店に立ち寄ったのに、そのあまりの画一性と偏りに裏切られた気持ちがするからだと思います。バランスのとれた知的満足感を与えてくれるという意味では、巷の書店はとて図書館にはかなわないでしょう。特に、青年期にはさまざまな知的分野に目を開く機会が与えられねばならないことは言うまでもありません。そういったことを考えるにつけ、高専図書館の果す役割の重要さを今さらながらに痛感する今日この頃です。

## 図書あれこれ

化学工学科 大 植 正 敏

昔、田舎の小学校では十分な図書の施設もなく、本1冊購入するにも町に買いに出かけなければならなかった。だから、あまり本との接触がなかったけれどもわりに弱かった小学校時代、風邪をひいては見舞のつもりか父が本を買い与えてくれた。また、何か事あればその都度本を買ってくれた。田舎ではあったが割に本にはめぐまれていたかも知れない。厚手のあまりいいカラー印刷でない表紙で、中のページもわら半紙程度に黄ばんだ紙の上の文字の本を見るとなつかしい臭いがする。身近に本が少なかっただけに大切に1冊ずつ扱っていたように思う。

共同の書物、図書館の本を利用し始めたのは中学生になってからである。図書館の本で調べるといよりもむしろ、偉人伝記などを友人の口こみで借りたりするのである。多少の読書指導はあったものの、図書館をフルに利用はしていなかった。高校になって、空調の部屋でただひたすら勉学出来ること、わからなければ書物を使って調べるといふことの場所が私にとっての図書館であった。

最近、連日仕事に追われる身では、「雑学でも…」とゆっくり読書の機会がなく、せいぜい読書をしたいのだがという思いである。それでも気に入った本があれば週1回の図書館への図書指導の際に、借用し、期日までに流し読みしたり、十分読んだりして消化している。家族は小説、偉人伝記などを、学校、もしくは公共図書館で借り読んでいる。本が氾濫する現在、書店で見る興味ある本を1冊残らず買うことは困難であり、このような場合に図書館を利用できることはうれしいことであり、また読めばそれで終りという本を買わずにすむこともよい。

公共的な一般の図書館は利用年令幅も広く、購入図書もよほど考慮されていると思われる。けれども個性的な要求の書物には不充足さがあるのではなかろうか。このような思いは本校の図書館にもあてはまるかも知れない。例えば、高校生年齢の一般教養の図書があるが、専門書が少ないなどというのと似ている。反対も勿論ある。しかし、年々、図書の冊数は増え、より利用価値のある図書館へ近づきつつ

あると思う。今後ふえる図書のため図書館が小さくなり、閲覧スペースなど狭くならないように、また、図書館が単なる書物の貯蔵庫にならないように利用されることを期待している。

## ある本を読んで思う

電気工学科 谷本忠則

「この愛いつまでも」何か歌の中に出てくる様な言葉ですが、俳優で歌手でもある加山雄三の書いたカッパ本の題名です。確か5年程前に妻が買って来て、私にも読むことを勧めていましたが、私は会社の事に追われて読んでいなかったのですが、その中妻は近所の奥さん方に廻していた様で、見かけなくなりました。最近本棚の中にその本を見つけ、そんな事を思い出して読み初めました。

内容の主体となっているのは彼の4人の子供(8・5・4・2歳)の子育て奮戦記で、項目別に彼の考えと実践の模様を書かれたものですが、随所で感動しながら読みました。その中の私の心に強く感じた幾つかの項目をあげますと、

1. 就寝前に感謝の気持で祈らせる。
2. 素晴らしい家庭はスポーツから生れる。
3. 「物」に謙虚な子供に育てる。
4. 子供との遊びはどんな他愛なくとも夢中になる。
5. 少年時代に夢中になるものがあれば、無気力に育たない。
6. 無遅刻・無欠席を目標にもたせる。
7. 時には子供と寝るのは、最高のスキンシップ。
8. 子供の立場にたって考えていると、子も親の立場に立つ。
9. 親子はきれいな言葉で、つき合う。
10. 今君がいるのは、先祖のおかげであると教える。

以上の事柄に対して彼はその方法を考え、子供の中に入って実践し、少しずつ変化して行く子供達を見つめて、一層心を励まして行く。その模様が温かく書かれていて、丁度彼の演ずる連続ドラマを見ている様で、その情景が浮んで来る様でした。この本を読んで我が身を思う時、仕事に懸命で子供と一緒にになって感激する事の少なかった事が、なにかたまらなく淋しい気がします。

嫁いだ娘が時々孫をつれて我が家に来ます。孫はすぐに外につれて行けと言って、出れば大喜びで走り廻る。この孫が、いじめに打ち勝つ男子に育てて欲しいと思うだけでは、大いに不足するものがあると思います。彼が書いている様に子供と一緒に遊んで、その中で色々徳性を植えつけて育てて行く事は、家庭教育の理想であり現在騒がれている教育問題の基本となるものと思います。

幼い時に親と共に味わった感激は、きっと少年時代、青年時代へと道を誤らず、大きく成長して行ってくれるものと信じます。

この本は終りに、父親は若くあれ、父親は大志を抱けと結んでいます。唯々頭の下がる思いです。

彼の後を若い父親が多く続く事を願うのみです。

## 〔図書室から〕

### I 図書館だよりの歩み(抄)

全国高専図書館が、独立したPR誌としての印刷物を余り出していなかった昭和54年1月、当時の野田尚武係長(現筑波大学図書館)の発案で第1号を発刊してから7年、どうやら消えもしないで続けて来たことにある種の感慨があります。何時も中々原稿が集まらなくて困ったこと、仕事の合間を利用してすることですから十分なことが出来なかったことなど。今回は20号として特別に溝端先生が御覧のように沢山の原稿を集めて下さいました。学生諸君が図書室を利用し、読書に親しみを覚え、人間としての成長にお役に立てばと願って、これからも絶やさず、少しでも充実したおたよりが出せるようにと願っています。学生諸君の投稿を歓迎します。僕、私の意見もどうぞ!

## II 「読書週間」の催し、その他

昭和60年度の読書週間は、前号でお約束したように「ハレー彗星」について展示いたしました。これまでの天文関係の書籍に、新たに出版された最新情報などを加え、かなり補充いたしました。この4月最接近する時までハレー彗星と仲良くなりましょう。この次は76年後の2061年です。それまで元気で生きている人はいるかな？

昭和60年度全国図書館大会へは福井洋子氏が出張しました。今年度のテーマは「生涯学習の時代に応える図書館づくりをすすめよう」です。高専分科会は前年度に引続いて「高専図書館基準」「高専分科会の在り方について」です。当校図書館づくりの上で将来お役に立ってくれると期待しています。

閲覧室の低書架を利用して、1月はNHKテレビで放映されているルーブル関係の書籍、2月は節分等の年中行事関係の本を並べました。興味のある人は私達の故里を見直してみてください。

---

## バック 図書館だより

No.	1	1979	1	化工	山本 績：汗牛充棟（など）
	2	〃	4	国語	細井誠司：劇画と読書
	3	〃	7	化工	石垣 昭：一冊の本との出会い
	4	〃	10	機械	島内一郎：私の読書感
	5	1980	2		読書感想文コンクール作品
	6	〃	5	数学	笠野卓夫：私の読書歴
	7	〃	10	化(一)	石川光二：偉人の伝記を読み
	8	〃	10		昭和55年読書感想文コンクール
	9	1981	4	独語	田北寛剛：ドイツの思い出
				化(一)	石川光二：“習・理・破”と読書
	10	〃	9	国語	小谷 稔：100冊読破のすすめ
				倫哲	木村倫幸：本を買うということについて
				電気	上田勝彦：視聴覚教育について思うこと
	11	1982	1		昭和56年読書感想文コンクール
	12	〃	4	国語	小谷 稔：読書計画の一助として
				機械	中谷 洵：視聴覚教育のすすめとライフ
	13	〃	10	校長	櫻井 洸：奈良高専図書館に想う
	14	1983	1		昭和57年読書感想文コンクール
	15	〃	5	機械	田中義雄：読書雑感
	16	1984	1		昭和58年読書感想文コンクール
	17	〃	5	国語	小谷 稔：図書室20年史余録
	18	1985	2	〃	小谷 稔：福井博士の講義を聞いて
	19	〃	9	〃	小谷 稔：本を読んでおけばよかった

奈良高専図書館だより

20号 特集

昭和61年2月 発行

編集・発行 図書室